

おわりのはじまりに

糸賀一雄『ヨーロッパ便り』を、近江学園で保育士をしていた高村瑛子さんが見せてくれた。

近江学園、びわこ学園での重症心身障害児療育実践と理論研究は全国障害者問題研究会のメインテーマ、発達保障理論の源流をなす。「この子らに世の光を」ではなく「この子らを世の光に」だ。

この「便り」は、1960年12月、コペンハーゲンやストックホルムで投函されている。こんな下りがある。

ホテルの予約などいっさい日本の旅行社にまかせてこちらに来たが、次の訪問国・ストックホルム以降のホテルの予約を知らせてこない。それで、最初の訪問地・コペンハーゲンの航空カウンターでせめてストックホルムの宿だけでも予約したいと交渉した。

「いまあなたがほしいのはストックホルム又はそれからさきのホテルの予約でしょ。とこ

ろが日本でおたのみになったのが、まだあなたに届いていない。しかしあなたは明後日ここをお発ちになる。それならここで、改めてあなたのためにストックホルムとブラッセルとパリと3か所のホテルの予約をとるようにいたしましょう」

「二重になるようなことはないだろうか」

というと、笑って、

「ともかくあなたの必要なことをさきにしなければなりません」

という。

なにやら付随して起こってくることは、まず、あとのことである。何がいちばん必要かということをしきりに決めることが、一番大切なのだ。

*

スウェーデンのイエテボリ。船員たちが来るという場末の居酒屋を見つけてきたのは、弁護士石田明義さんとひかり園作業所（当時）の立岡眺さんだ。

その日、誕生日だったあかつき園の小野隆二さんをさかになに、みんなで飲み、しゃべりあった。1993年秋。私にとっては、3歳になった娘を連れた6年遅れの「新婚」旅行を兼ねた初めての北欧の旅だった。

その後、64歳で亡くなった小野さんにお別れを言いに行った夜、そんな思い出話を涙顔と笑顔とくしゃくしゃで奥さんの美佐子さん（現在、東松山市議）としたものだ。

高井博之さんも、あの日の居酒屋にいた。彼は、デンマーク生活支援法に胸をはった障害者夫妻の話聞いて、「私たち自身が願っている内容とこの国で行われている内容になんら変わりはないこと。このことに私は自信と確信をもって、これからの仕事や障害者運動にいかしていききたいと思います」と報告集に感想を綴った。それから、大阪の地で、組織者として精一杯がんばった。昨年の秋、脳梗塞で突然帰らぬ人となった。52歳だった。高村さんもすでに亡くなっている。

かなしいけれど、人間のからだは、いつかは消えていく。

けれど、その意志は私たちが継承することによって永遠となるのだと、旅を何度も一緒にしてきた84歳の親友・上杉文代さんと語り合ったことがある。

当時3歳だった私の娘は19歳になった。福祉を学びたいと大学生になる。私たちは「人生のリレーランナー」なのだ。

それにしても、障害者運動や旅と一緒につくる仲間たちと、友情を深めながら、同時代を生きていることの嬉しさ。幸福とはそういう時間のつきかさねなのかもしれない。

本書は、日本障害者協会（JD）機関誌「すべての人の社会」連載（「北欧Ⅱ最近障害者事情」2007年、「北欧Ⅱ最近障害者事情PARTⅡ」2009年）、全国障害者問題研究会機関誌「みんなのねがい」の掲載原稿、インターネットの個人メールマガジンで発信してきたものをもとに、加筆修正したものだ。写真は、旅で撮りためたものから使用し

たが、数点、高校時代の新聞部顧問・守随吾朗先生から提供していただいた。

本書をつくるにあたっては、妻と娘の私の家族、全障研全国事務局の同僚や品川文雄委員長、中村尚子副委員長はじめ役員のみなさん、JDや障害者運動の仲間たちに、たいへんお世話になった。

そして、いつも北欧の旅をコーディネートしてくれる深井聡夫さん、表紙絵をこころよく提供してくれた深井せつ子さん、すべての人たちに感謝の気持ちでいっぱいだ。

*

シベリア上空に、朝焼けがはじまり、太陽が地平線に昇ってくる。

成田はもうすぐだ。

旅の終わりは、また新しい旅のはじまりだ。

2009年4月 22年目の家族の誕生日を前に

蘭部英夫